

報告一

菌部寿樹『日本中世村落文書の研究―村落定書と署判―』
から考えたこと―近世（文書管理）史の側からみて―

富 善 一 敏

じめに

私は、本シンポジウムで書評させていただいた菌部さん著書から、近世中後期村落史及びアーカイブズ学を学ぶとして、多くの示唆を受けた。ここでは、当日報告しレジュメに即して、（１）中世村落定書と近世村法（２）世地下文書と近世村方文書（３）地域性の問題、の三点について述べてみたい。

中世村落定書と近世村法（村定）

近世村法（村定）の研究史は、近世では村制裁の問題を

史苑（第八〇巻第二号）

中心に、領主法との関係の文脈で論じられてきた。報告者は近世村法の研究史について、領主―村―百姓三者の関係に注目して、一九九六年に以下のように述べたことがある。

戦後の村定（村法）研究の出発点たる前田正治『日本近世村法の研究』、大出由紀子「近世村法と領主権」に代表される法制史側の見解である。前者は村法の年次的変化及びその内容の詳細な検討を行い、村制裁に現れる村法の自主性を高く評価し、村法を村の自治的規約として領主法と対置する。また後者は領主法と村法との関係を、村法の成立過程における自主性の限界、効力貫徹過程における領主の村制裁黙認と村による領

藪部寿樹『日本中世村落文書の研究―村落定書と署判―』から考えたこと（富善）

主刑罰権の利用及び村制裁の自己制限から論じ、村側のアプローチにより村法と領主法が接近し同一体系をなすとする。こうした見解は、村―百姓間で行われる村制裁を重視し、領主との関係において村定（村法）の自主性の表象と評価するものであり、村―百姓間の関係を事実上捨象し、領主法と村法の対抗関係を一元的に論じているのが問題である。

もう一つは、児玉幸多の前田批判、上杉允彦「近世村法の性格について」に端的に示される近世史側の見解である。前者は村法を百姓自ら定めたものではなく与えられたものであり、領主支配権の伸長と評価する。また後者は、五人組帳前書との比較において、村法の内容・形式・運用実態を検討し、村法は領主法の補足・実施細別であり、領主の村落支配の方策と位置付ける一方、それに対抗し個々の条項の改正を行わせ、村政改革により新しい村法を制定する小前百姓の動向を重視する。これらの見解は、村定（村法）が個々の百姓にとって持つ意味を重視し、それを領主法の補完として評価するため、領主―村間の関係を捨象した、領主法・村法と百姓との対抗図式になっているのが問題である。

その状況は今でも基本的には変わっておらず、藪部さん

が指摘するように、近世の村落定書を古文書学的に分析する研究は皆無であり、前田『日本近世村法の研究』が「村法の形態」で若干の指摘を行うが、「村法の呼称から実質的な区別は見出し難い」として分析の有効性を否定し、以後古文書学的アプローチが結果的に閉ざされることになる。⁽³⁾

こうした近世における村落定書研究の立ち遅れの中で、近世期に主流となる定書様式と村落定書（村法）の内容との関連の問題や、本書第五章で検討された衆議文言と署判との関係の検討などの氏の指摘は、近世村法の分析に必要な視角・方法であり、今後更に研究を進める必要がある。⁽⁴⁾後述する近世村方文書論ともからめて、文章化された村という組織体の意志決定としての近世村法という視点が必要であろう。

二 中世地下文書と近世村方文書

ここでは、中世地下文書と近世村方文書との関係について述べてい。

まず、史料の解釈と位置付けについてである。藪部さんは、第一部付論一「明応七年丹波国山国莊黒田下村の紛失定書二通」で、史料付一―二として、一四九八年（明応七）一月三日付の丹波国黒田下村惣・別当民部増清堂紛失定

書案を取り上げ、同年同月同日付の史料付一―紛失定書の文書形態をもとに作成された「偽文書」であり、「近世のある時点で、山国莊本郷と係争關係にあつた久喜谷某所に対する黒田下村の土地領有を正当化するため作成されたもの」だが、「紛失定書としての意義にかわりはない。このような偽文書作成の意図に基づいていたとしても、当時の黒田下村にとっては史料付一―二も「正当な紛失定書」であつた」と評価する。

報告者にとつては、近世期に作成された偽文書を、中世期の村落定書として扱うことに違和感があつた。偽文書であることが明らかである以上、本文書は近世文書として扱うべきであり、従つて表二―一の村落定書一覧から除外すべきではないか。宮座のある宮春日神社保管ではなく井本家に保管され伝来したという重要な指摘とも関連付けて、近世における中世の村落定書の意識化や由緒に伴う偽文書作成の問題とからめて、今後詰めるべき課題だと考える。

次に、中世地下文書と近世村方文書とは連続するか断絶するかという大きな問題について、アーカイブズ学の基幹タームである現用／非現用の問題とからめて、報告者の考えを簡単に述べたい。現時点では、連続よりは断絶の点が大きかったのではないかと考えている。近世村方文書は、近世初期に江戸幕府により創出され、村社会に持ち込まれ

た、検地帳、年貢割付状・同皆済目録、村入用帳、宗門人別改帳などの対領主文書が中心となつてゐる。それに対し地下文書は、土地証文や村落定書などの村落内部文書については、中世期から継続して作成されるが、山水論や家格・由緒にかかわる文書以外は、現用価値を失い不用となつたのではなからうか。菅浦文書の近世期における存在形態の問題についての研究が数多く発表されており、近世村方文書管理史の立場からも、今後研究したいテーマである。

三 地域性の問題―畿内・近国と関東との違い―

菌部さんが本書第二部第六・七章で検討した、村落文書の惣判・惣印の問題については、未だ検討が不十分であり、関東の惣百姓印と畿内・近国の惣印との違いを考える際の素材として、千葉真由美氏の著書『近世百姓の印と村社会』⁹⁾での指摘を引用するに留めたい。

・惣百姓文書、中でも惣百姓印文書は一七世紀の関東地域に特徴的に見られる文書形式であることが改めて確認できた。また惣百姓文書は、主に村役人層の恣意によつて作成されたと考えられるが、差出箇所「惣百姓」という文言を使用することで村が一致団結していることを示すという反面、差出箇所を便宜的にまとめ

菌部寿樹『日本中世村落文書の研究―村落定書と署判―』から考えたこと（富善）

た記載という側面があることを示したものである。^⑩

・渡辺氏は関東の「惣百姓」について、庄屋を含まず、庄屋との間に一定の対抗関係を孕むという点で、水本邦彦氏によって検討された畿内の「村惣中」とは異なっているとする。また神崎彰利氏が、関西では花押・略押等を中心とした村社会が展開しているのに比べ、関東ではそうした世界は展開しておらず、関東・関西の違いは大きい、と指摘しているように、畿内を中心とした「惣」と関東における「惣百姓」とではその性格は本質的に異なるものとして捉える必要があるだろう。記載形式の違いでいえば、惣は村の乙名衆を中心とした組織で庄屋を含むのに対し、関東の惣百姓文書では多くの場合、名主は別に記載され、「惣百姓」に含んではいなかった。名主・組頭以外、村役人層以外の百姓層を示すことも多い。^⑪

おわりに

本書及び当日の議論から、実にたくさんのことを学ばせていただいた。この場を借りて、菌部さん、地下文書研究会及び当日の参加者の皆様に改めてお礼申し上げます。感想を一点だけ述べさせていただきます、拙いコメントの結びと

したい。

菌部さんは本書の終章で、近世の村落定書は、サンプル数が圧倒的に足りないが、定書が特定の様式のないものが大多数だとし、「近世村落は村落定書の様式そのものに注意を払わなくなったのではないか」と述べる。また、「地方文書研究で様式論を論ずる意義はほとんどない」との近世史研究者の意識を述べ、「村落文書・地下文書の研究者と地方文書の研究者が、少なくとも文書のあり方を軸に情報を交換したり共有してきたこと」がなかったと指摘する^⑫。報告者も全く同感であり、双方の研究者同士の交流をより深めることが重要である。丹波国山国荘のような、中世地下文書と近世村方文書が両方伝存する地域の史料調査や共同研究は、その格好の素材であろう。

【付記】シンポジウム当日には、木印署判と家号印の類似についても述べたが、本稿では省略した。御寛容を乞う次第である。

註

(1) 富善一敏「近世中後期の村落と村定―信州高島領乙事村の事例から―」『史料館研究紀要』二七号、一九九六年、五一頁、なお本論文は、国文学研究資料館学術情報リポジトリよりダウンロード可能である。

(2) 菌部寿樹『日本中世村落文書の研究―村落定書と署判―(小)子社、二〇一八年、以下菌部書と略す) 一八〇頁。

(3) 菌部書一八〇頁。

(4) 菌部書二〇九頁注五。

(5) この点に関連する近年の研究を二点あげておきたい。

水本邦彦氏は、村における盗みを素材として、公儀―村―百姓三者の関係を「建前」と「内証」に区別し、前者では村は国家の代執行機関(ライトウルギー的義務団体)と位置付けられ、その私的制裁を否定されるが、後者では村は独自の掟を制定し、村内裁判を実施することで領主と対立すること、また公儀と村との関係について、村による公儀の法・刑罰の主體的・部分的「活用」を、公儀が内々に容認することで、両者は相互依存の関係にあるとした(「公儀の裁判と村の掟」、同『近世の郷村自治と行政』東京大学出版会、一九九三年に所収)。また近年ではこの見解をさらに発展させ、近世の自力のあり方について、自助・自力を基本とする中世社会から、大幅に他力・依存を含んだ近世社会への移行に伴い、中世の「自助型自力」と区別した、天下の政道や成敗については公儀権力を支持し(近世村掟の他力依存部分)、生産活動や生活秩序については自分たちでルールを決め(近世村掟の自力解決部分)、公儀権力

を支持することで生じた余力を生業に投入する「身分的自力」だと論じている(「第二講」「身分型自力」の社会論」、同『日本歴史私の最新講義〇三 徳川社会論の視座』敬文舎、二〇一三年に所収)。

また横田冬彦氏は、近江国中野村の近世前期の村掟及び領主触書の「法の村請」の検討から、寛文年間に地域社会全体の正義と安全を保障する「公儀法度」が成立する中で、その下での庄屋宛の村掟を公儀法体系の分有と位置付け、領主の支配と中世末以来の惣中の自治の両者が、公儀の下で庄屋による「公的な行政」として統合されたと評価している(近世村落における法と掟『神戸大学文化学年報』五、一九八六年、同『日本の歴史第一六巻 天下泰平』講談社、二〇〇二年)。

(6) 菌部書一七三頁。この点について坂田聡氏は、原本調査の結果、付一一文書で菌部氏が「く具谷」と解釈した谷名は「くるミ谷」であり、延宝年間の灰屋村・片波村殿里山争論を有利に進めるべく偽作された偽文書だとする(「中近世移行期の在地社会と文書―丹波国山国荘地域における百姓のリテラシー論を踏まえて―」『中央大学文学部紀要 史学』第六四号、二〇一九年)。史料付一一と二は、四至の記載も全く異なっており、坂田氏の見解に同意したい。

(7) 高橋実氏は、近代期の村方文書引継目録に近世期の文書が少ない理由について、明治政府の旧村役人家文書に対する公私分離の姿勢、明治政府の自前の調査と帳簿作成による近世帳簿の必要性の低下、年貢村請制から近代的土地所有に基づく地租の個人請制への移行による村方文書の基本書類の有り様の变化を指摘しており(「近世における文書

藺部寿樹『日本中世村落文書の研究―村落定書と署判―』から考えたこと（富善）

の管理と保存」安藤正人・青山英幸編著『記録史料の管理と文書館』北海道大学図書刊行会、一九九六年、一五三頁）、中世地下文書と近世村方文書の関係を考える際に参考になる。

- (8) 田中克行『中世の惣村と文書』山川出版社、一九九八年。松井直人「菅浦文書の「発見」とその前後」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』第四九号、二〇一六年。青柳周一「近世の菅浦村と古文書について」同第五二号、二〇一九年、など。

- (9) 岩田書院、二〇一二年。以下千葉書と略す。

- (10) 千葉書一二五頁。

- (11) 千葉書一二六頁。

- (12) 藺部書三二七頁。

（東京大学経済学部資料室 学術支援専門職員）